

東大寺東塔院跡の調査

東大寺東塔院は、対をなす西塔とともに当代随一の高さを誇った七重塔と、それを囲む廻廊等からなります。これらの創建は奈良時代に遡りますが、平安時代末、平重衡の南都焼き討ちに遭い焼亡しました。鎌倉時代に入り再建されたものの、南北朝時代に落雷により再び焼失し、それ以降再建されることはありませんでした。

奈良文化財研究所は、平成27年度から東大寺、奈良県立橿原考古学研究所とともに史跡東大寺旧境内発掘調査団を結成し、境内整備事業の一環として東塔院跡の発掘調査を実施しています。事業の5年目にあたる今年度の調査は、塔を取り囲む東面・北面・西面の廻廊および門の実態解明と、遺存状況の確認を目的として実施しました。調査期間は2019年7月22日から12月20日、調査面積は827.25㎡です。

今年度の調査では、奈良時代創建当初の門の規模と柱配置を初めて確認することができました。特に東門の調査において、奈良時代創建期の礎石建物と鎌倉時代再建期の礎石建物を重複して検出し、それぞれの構造や規模と造り替えの様子があきらかになりました。

奈良時代創建期の東門は桁行3間、梁行2間で建物規模は桁行約12.7m(中央間15尺、両脇間14尺)、梁行約7.1m(12尺等間)と推定できます。この東門にとりつく東面廻廊では廻廊棟通りの礎石と敷塼列を検出し、奈良時代の東塔院廻廊は中央を壁で仕切られた2列の通路をもつ複廊であったとする昨年度の調査所見を追認できました。

また、鎌倉時代の東門基壇上には礎石1石と門の出入りに関わる凝灰岩切石や東雨落溝を跨ぐ通路と

なる敷石遺構等が良好な状態で残っていました。この鎌倉時代の再建東門は、奈良時代創建期の門と同様の桁行3間、梁行2間の礎石建物ですが、創建門基壇の内庭側を削り、建物規模を桁行約11.7m(中央間15尺・両脇間12尺)、梁行約5.4m(9尺等間)へと規模を縮小していることがわかりました。北門、西門の調査でも同様の所見を得ており、鎌倉時代に再建された東塔院の東・北・西の三門は同規模であったことを確認しています。

このほか、東面廻廊と北面廻廊がとりつく東塔院東北隅の調査では、元々の自然地形である東から西に下る尾根の斜面を削り平坦面を確保するなど、自然地形を大きく改変して廻廊を築いていたことがあきらかになりました。

今回の調査を通じて、奈良時代創建期の東塔を囲む廻廊と門の実態があきらかになるとともに、鎌倉時代の再建に際して、門や廻廊の基壇の幅を狭めて規模を縮小し、複廊を単廊へと造り替えるなど大きな改造をおこなっていたことがあきらかになりました。

なお、11月10日には現地説明会を開催し、850名の方にお越しいただきました。また、調査中も修学旅行生や国内外からの観光客などたくさんの方々が現場の前で立ち止まり、調査の様子を見学されるなど、私たちの調査への関心の高さを感じました。

5年間にわたる発掘調査により、東大寺東塔院のすがたが徐々にあきらかになりつつあります。これからはさらに出土遺物の詳細な分析も含めた総合的な検討をおこなう予定です。今後の成果にご期待ください。(都城発掘調査部 小田 裕樹)



東門・東面廻廊調査区の全景(南西から)



鎌倉時代東門基壇上面(北から)